

名士と山水

東西洋の山川觀(上)

黒田清輝君談

▲肥滿あるけはしても歩行あるける 私は能く旅行を致しますけれども極めて平凡の旅行で、探險とか探勝とか云ふ様な目的で行つたことではないのです夫で第一評判の富士登山すらも裾野を廻つた位で、彼れ以上登つたことはない、又登つて見やうと云ふ氣も起らない、尤も私は斯様に肥滿して居るので山行に適しないのであらうと思ふ人もありませんが、然うではない歩行の堪ぬ體質ではないのですが、併し登阪には平常の人よりは比較的苦みを感じるのです、夫故靜かに氣の合つた人とソロリソロリ登れば險峻岳も味えぬことではないのです、左れば富士登山の趣味も解して居る、貴社の杉浦君のスケッチなどは氣を注げて見て居るが、實の所を白狀すれば一時間でも二時間でも朋友と戯談じやうだん話をしたり何かして居るのが樂で是が習性となつた怠性なまけしやうです

▲山海の變化と趣味 私の曾游を回想すれば矢張り歐羅巴です、皆さんの御通りになる印度洋を渡つて二回ほど行きました、尤も一回は太平洋を航し阿米利加を経て倫敦に着きました、私の太平洋旅行は一番是が重なるのです夫で海の上に於ては色々な變化を見、又殊に印度洋の如き靜かな海を夜遅く一人で籐の椅子なんかに寝ながら自己の身体は那邊に在るか分らない様な氣持になる、是が一種の愉快と思はれるのです、夫から海は御存知の通り種々の色合や形象の變化が多いものですから、何方かと云ふと山の變化の趣味よりも海の變化の趣味の方が深く感ずる様に思はれる、勿論是は天然にも依りませうが、或る人の著述又は話、或は歴史等の聯想で以て其の趣

味を感じることが多いのです、夫で一例を擧ますれば鎌倉にしてもさうです、地景としては詰らない所ですけれども鎌倉に行つて何を感じるかと云ふと、一番深く感ずるのは歴史なんです、歴史を取除けて仕舞ふと左程趣味はないと云つても過言ではなからうと思ふのです

▲北海の色合と著書 夫から海の趣味に就ては佛蘭西の作者で雅名をビイル、トツチと云つて日本の事を悪口半分に書いたことのある人です、是は海軍士官であつて其著述は海上に關したことが多い、此の人の文章や著述は澤山讀みましたが中面白、ロツチの書物中殊に有名なのは愛蘭土の漁師と云ふのであります是は彼の邊に漁にゆくやつ困難なることを書いたもので、文章として尤も面白く感じたのは北海の色合又其の海と人との關係などが如何にも愉快に寫生的に出來て居る、私共は太洋の旅行でロツチの書いた通の海を見ることが屢々あるのです、是は西洋許りではありませぬ、日本でも古い所では橘南谿の霧島山に登つた記事を見ると繪畫としても種々の變化に富み面白く思はれるのです、

『中央新聞』明治四〇年八月二十八日